

無痛分娩説明文書

1. 無痛分娩の目的・必要性

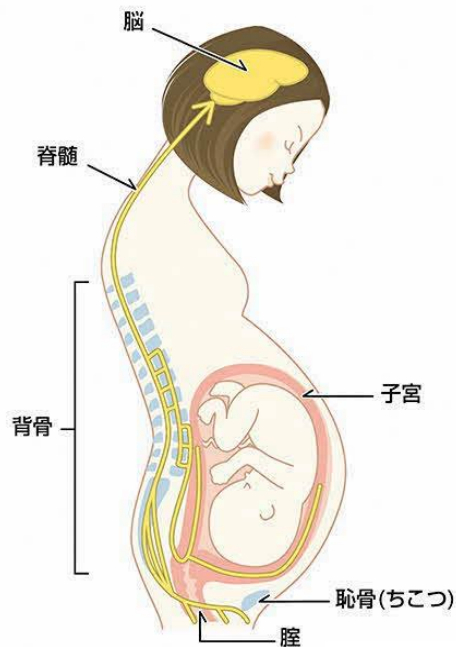
出産に伴う子宮の収縮や、産道が広がることによる刺激は、背骨の中の脊髄を通して脳に伝わり痛みとして感じられます。無痛分娩では、硬膜外麻酔や脊髄くも膜下麻酔により子宮や産道から伝わる痛みを脊髄で遮断することで出産時の痛みを和らげることを期待します。

無痛分娩を行わなくても、一般に安全に分娩を行うことは可能ですが、分娩による体力の消耗を防ぎ分娩後の体力の回復につながると期待できます。また、基礎疾患のある方の場合は身体の負担を軽減できると考えられます。

無痛分娩を行っても全く陣痛が分からなくなるわけではなく、耐え難い痛みを和らげるのが目的です。

お産の痛みの伝わり方

子宮が収縮したり、子宮出口や膣が引き伸ばされたりすると、その刺激は神経（黄色く描かれた線）を介して脊髄に伝わります。その後、脊髄を上って脳にいたり、「痛み」として感じられます。



©日本産科麻酔学会(一部改変)

2. 無痛分娩の麻酔方法

母児の安全を守るために、分娩中は赤ちゃんのモニターはもちろん、お母さんの血圧、酸素飽和度などを監視し、定期的に観察します。

1) 硬膜外麻酔

無痛分娩で主に行われる方法です。背骨の中の硬膜外腔に細い管を挿入し、局所麻酔薬と少量の麻薬を注入します。

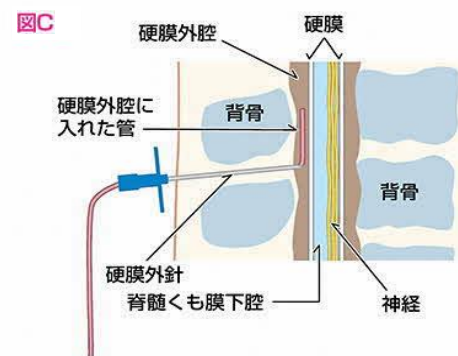
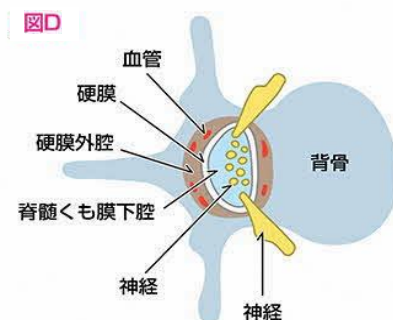
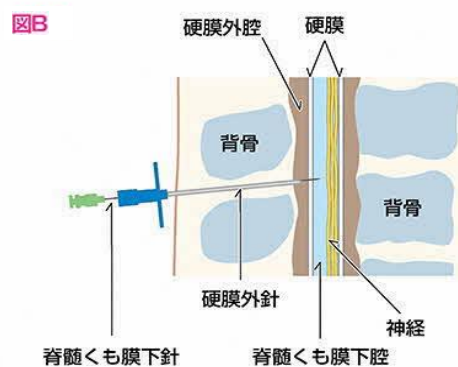
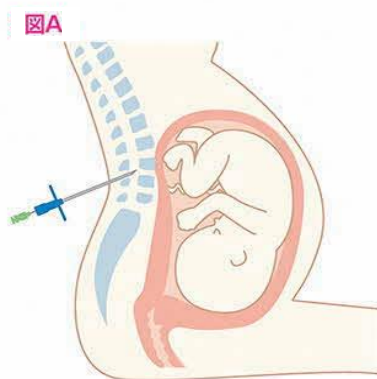
2) 脊髄くも膜下麻酔 硬膜外麻酔併用

脊髄くも膜下麻酔は硬膜の奥の脊髄くも膜下腔に、ごく細い針で薬を注入します。硬膜外麻酔に比べて効果がより速くより強く現れます。併用する場合は、一度の処置で行う場合と二度に分けて処置を行う場合があります。

併用するかどうか、処置を分けて行うかどうかは、分娩の進行などを考えて医師が判断します。

脊髄くも膜下硬膜外併用鎮痛/麻酔

お母さんの体を 図A に示しました。背中の針の付近を拡大したものが 図B と 図C です。 図D は背骨の横断面図です。脊髄くも膜下硬膜外併用鎮痛/麻酔では硬膜外針が硬膜外腔に入った後に、別のごく細い針を、硬膜外針の中を通して脊髄くも膜下腔に刺し、脊髄くも膜下腔に薬を注入します (図B)。その細い針だけを抜き、今度は硬膜外針の中を通して硬膜外腔に細い管を入れます (図C)。そして管のみを残して硬膜外針を抜きます。管から薬の注入をします。



3. 無痛分娩を始める時期

あなたが無痛分娩を始めてほしいと希望し、産科医の診察をへて開始時期を決めます。早すぎると薬の総投与量が多くなり、遅すぎると効果を感じる間もなく分娩に至るかもしれません。分娩の進行状況や妊婦さんの状態をみて考えます。

4. 無痛分娩の効果

無痛分娩を行っても痛みが全くなくなるわけではありません。無痛というより和痛という表現の方がぴったりしています。お腹が張っている感覚はあり、いきむ力が残っていないとお産の進みが遅れます。

効果が不十分な場合や、部分的にしか効果が出ない場合があります。その場合は管を入れ直すこともあります。

麻酔なので足の感覚が鈍くなり、しびれたり力が入りにくくなることが多いです。

排尿の感覚も麻酔でわからなくなるため、管を通して尿を出すことになります。

5. 無痛分娩中の過ごし方

- 1) 食事をとることができません。水、お茶、スポーツドリンクなどの水分はとることができます。
- 2) 麻酔開始後は歩き回ることはできません。ベッド上で、楽な姿勢で過ごします。
- 3) トイレに行けないので、適宜管を通して尿を出します。

6. 副作用・偶発症

麻酔の効果にともなっておこる副作用

1) お産への影響

分娩第二期の時間が延長すると考えられています。帝王切開になる確率は変わらないと考えられています。

2) 低血圧 嘔気嘔吐

3) 排尿困難

4) かゆみ・発熱

以下はまれな偶発症です

5) 頭痛

硬膜を傷つけたあと、脳脊髄液が漏れることにより頭痛がおこることがあります。

6) 局所麻酔薬中毒

血液中の局所麻酔薬の濃度が高くなり、耳鳴りやろれつが回らない、興奮などの症状が出る場合があります。

7) 高位脊髄くも膜下麻酔

硬膜外腔に入れた管が途中で脊髄くも膜下に入ってしまうことがあります。麻酔が効きすぎて呼吸ができなくなったり、血圧がさがり、意識がなくなります。

8) 神経障害 感染 血腫

非常にまれですが、神経損傷や感染、血腫（血の塊）により永久的に障害が残る可能性があります。

9) 薬に対するアレルギー反応

※ 硬膜外鎮痛を受けなくても、お産のあとに起こる可能性があること

産後の神経の障害：お産のあとの神経の障害は、赤ちゃんの頭とお母さんの骨盤の間で神経が圧迫されることや、お産のときの体位が原因で起こることが圧倒的に多いといわれています。

腰痛：妊娠中から産後に腰が痛くなるがよくあります。しかしこれらの多くは、妊娠にともなって背中中の靭帯が軟らかくなり、妊娠して大きくなった子宮の重みがかかると、背骨にかかる負担が大きくなるために起こります。腰痛は、硬膜外鎮痛を受けた人も受けなかった人も同じくらいよく起こると報告されています。

7. 副作用・偶発症の発生時の対応

- 1) 器械分娩が必要になることがあります。
- 2) 血圧低下時には、点滴や昇圧薬を投与して治療します。
姿勢を変えていただくことでよくなることもあります。
- 3) 排尿困難が見られた場合には、排尿は管を通して出します。
- 4) かゆみや発熱に対しては、クーリングで対応しますが、場合によっては血液検査を行い、適切な処置を行います。
- 5) 頭痛時には、安静にし、鎮痛薬を飲んで治療をします。
頭痛がひどい場合や長引く場合は、「硬膜外血液パッチ」を行うことがあります。
- 6) 局所麻酔薬中毒や高位脊髄くも膜下麻酔時には、症状に合わせて治療薬の投与や人工呼吸などの処置を行います。
- 7) その他、症状を注意深く観察し、適切な処置・治療を行います。

副作用・偶発症に対する治療は保険診療で行います。

8. 代替可能な方法

- 1) 点滴による鎮痛
簡便ですが、母体への副作用や出生直後のベビーに影響があるかもしれません。当院では行っていません。
- 2) アロマテラピーや呼吸法
痛みから気をそらす効果はあるかもしれませんが、直接的な鎮痛効果は低いと考えられます。
- 3) 通常経膣分娩
硬膜外麻酔を行わなくても安全に分娩は可能です。

9. 費用

無痛分娩は自由診療で、分娩費用に加えて所定の費用を申し受けます。

10. 同意について

無痛分娩を希望され、同意書を提出された場合でも、処置を開始するまではいつでも撤回することができます。やめる場合はその旨をお知らせください。あなたに不利益が生じることはありません。

11. 処置に伴う臨床研究利用について

この処置に伴い得られた記録は医学研究のための大切な資料となることがあり、当院の研究倫理委員会で承認された研究にのみ将来利用させていただくことがあります。その場合も記録等は匿名化して取り扱われるので、個人情報外部に漏れることはありません。またこれらの医学研究によって得られた成果等が、学術集会や科学専門誌で発表される場合がありますが、個人が特定されることはありません。

12. 連絡先

本検査・治療について質問がある場合や、検査治療を受けた後緊急の事態が発生した場合には、下記まで連絡して下さい。

〒675-8611 加古川市加古川町本町 439 番地 (079) 451-5500(代)
加古川中央市民病院 麻酔科

*説明後、一式（説明文書・同意書を含む）をコピーし、コピーを患者側・原本を病院側が保管する。